



ジェンダーの授業で対話を模索する

文学部 武内 佳代



高校、大学での非常勤講師を経て、2011年に文教大学に着任。研究対象は主に三島由紀夫文学と戦後・現代文学。女らしさ／男らしさにつきまとう政治性に着目したいわゆるジェンダー研究の観点进行分析軸として、文学作品が戦後社会にどのような影響を果たしたのか、あるいは、現代社会にどのような役割を果たしているのかを研究している。近年では、女性誌と文学作品との関係や、文学に描かれた女性障害者の問題に取り組んでいる。

(たけうち かよ)

専門の日本近代文学研究ではジェンダー批評を採り入れているため、文学作品だけでなく、様々な文化や事象にあらわれる日本社会のジェンダーをめぐる問題にも関心を持っている。ここでは、そうした関心を糧としてコーディネーターとして試行錯誤しつつ構築してきたジェンダーに関するオムニバス授業「総合講座Ⅳ」の取り組みについて紹介させていただく。

1. 授業内容の模索

—「女性学」から「ジェンダー研究」へ

文学部共通教養科目である総合講座Ⅳは、私が本学着任当時、すでにジェンダーに関する科目とされていたが、学内で一般に流通する呼称は「女性学」であり、内容も女性問題が中心に扱われていた。もちろんジェンダー研究がフェミニズム研究に端を発し、また、現在でも女性が社会的劣位に置かれている限り、そのように女性問題に焦点を当てること自体は驚くにあたらない。だが受講生の大半はまだ社会に出たことのない者たちであり、また、共学である本学では受講生の半数近くは男子学生で占められる。そうした彼らに殊更に「女性の低賃金」や「女性の人権」について講じて、実感をおぼせるのは難しく、拒否反応を起こすことさえあるのも事実である。加えて、そもそもジェンダー研究自体、女性だけでなく男性、あるいは両性的な存在や男女どちらとも自認していない存在といっ

た多様なジェンダー・アイデンティティをもつ者を包摂する学問なのだ。たとえば、なぜ女性ばかりが家事を引き受けるのか、なぜ女性の国会議員が少ないのかといったことだけではなく、なぜ男性は就職・結婚しないか、一人前とみなされないのか、なぜ男性は男性と結婚できないのか、さらには、なぜパスポートに性別欄があるのか、なぜインターセックス（生まれつき性器・染色体等の性別が判定しにくい状態）の者が社会生活で悩むことになるのか、といったことにも注目する。そして、そこにある権力関係や抑圧状況を可視化し是正することで、あらゆる市民の尊厳が保たれる共生社会を目指す学問である。

以上を踏まえて、総合講座Ⅳでは、まず内容を女性問題に限定しないよう刷新することからはじめた。新たにフェミニズム運動からジェンダー研究への流れを解説する回をもうけ、その回で、従来手薄だった男性問題やインターセックスの問題についても言及するこ

とにした。さらに、男性同性愛やトランス・ジェンダーをはじめとする、いわゆるセクシュアル・マイノリティ（LGBT＝レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランス・ジェンダー）の問題も採り入れるようになった。

2. 対話の模索

—対談形式・コメントペーパーの活用

とはいえ、ジェンダー規範によって困った経験のない学生にとっては、ジェンダーの問題など対岸の火事ではない場合が多い。女性問題ならば、具体的な記事や話題を提供すれば、かろうじて親身に考えてもらえるかもしれない。だが、特にLGBTの問題となると、当事者でない学生にとってはやや腰が退ける話題のようだ。実際、一年目に授業を行ってみて感じたのは、内容を多様化するだけでは、学生に、ジェンダーをめぐる諸問題にコミットし、当事者とともに乗り越えようという意識を芽生えさせるのは困難だということだった。そこで二年目から試みたのが、LGBT当事者の立場からジェンダー問題に取り組む研究者を講師に招き、講師と受講生との対話を採り入れた授業を行うことだった。

ただし、受講生が150名から200名ほどいる大教室での対話は困難を伴う。LGBTの当事者の学生にせよ、非当事者の学生にせよ、ただでさえ尻込みしてしまう話題であるばかりでなく、それを大教室で発言することは比較的控えめな文教大生にとっては難しいようだ。加えて、とりわけ非当事者の学生たちにとっては、当事者である講師にどのような言葉を投げかけていいのかさえ分からず、戸惑いがあるようだった。

そこで採用したのが、講師とコーディネーターとでマイクを持ち、二人の間で素朴かつ率直な質問をぶつけ合い、意見交換する、いわゆる対談形式を採り入れた授業だ。対談を通して、まず私たち教員が対話の方法それ自体を受講生たちに示す。この対談の中で、その都度受講生からの質問を募ってみると、受講生たちは「個人的に発言する」というよりも、むしろ「議論に参加する」という気楽さと情熱とで、様々な質問や意見をぶつけてく

れるようになった。そして今では別の講師による授業にも、この形式を活用している。またそれとは別に、自ら発言できない受講生のために、授業時間内にそれぞれにコメントペーパーを書いてもらい、そこに書いた意見をその場で発表させ、講師やコーディネーターがコメントをつけるという形式も採り入れている。今後はグループワーク等も試み、さらに対話の道を拓きたい。



「授業風景（手前は岩川、奥は武内）」

3. まとめ

—対話は授業の外へ

このように4年間、ジェンダーをめぐる対話と共生の道を模索してきた本授業の最大の達成だと思われるのは、本授業がきっかけとなり、今年度より本学にセクシュアルマイノリティ・サークル「のとまる」が発足したことだろう。授業を通じて様々な人権意識や多様なジェンダー・アイデンティティを意識化した受講生たちが、徐々に、授業後に教壇までやってきたり、授業外の時間に私の研究室を訪れたりし、自らの抱える問題や考えについて語ってくれるようになっていった。そして、それらに対して私も積極的に質問、応答を繰り返し、ジェンダーをめぐる現代の課題について改めて考え直す機会を与えられてきた。そのようにして授業内の対話が授業の外へと延長され、新たな学びあいや「のとまる」という具体的な活動へとつながったことは望外の喜びである。とはいえ、まだまだ、学生の発言を活発化させたり、男子学生も女性問題に積極的にコミットできるようにしたり等、授業改善の余地は山ほどある。今後も受講生や他の講師とともに模索を続けていきたい。

※本文は「のとまる」の許可を得て記したものであることを断る。